



躍進



昭和五十一年六月
完成したばかりの
中郷中学校調理室

回覧

令和8年10月19日

ともに食べ、ともに考える

校長 田口 秀行

昼の12時過ぎ、調理員さんが毎日、出来立ての給食を校長室に運んでくださいます。「今日は〇〇がテーマの献立です！」などのコメントとともに、おいしい給食をいただいています。

先日、11月に開催される給食の協議会にあたり、全校生徒を対象に給食アンケートを実施しました。「給食はおいしいか」「給食の時間は楽しいか」の質問への結果を見ながら、いつの時代も、子どもにとって給食は特別な時間であり続けていると感じます。

学校給食の歴史を紐解くと、日本において、給食が担ってきた2つの役割が見えてきます。一つは「子どもの貧困対策」、もう一つは「被災者支援への貢献」です。とりわけ、戦後に起きた自然災害により学校内に開設された避難所で過ごす方々の命をつないだものの一つが、給食施設での調理員等による炊き出しでした。これが全国の学校に給食施設が設置されるきっかけとなりました。

中郷中は、昭和51年6月1日に給食が完全実施となります。1ヶ月ほど経過したPTA広報誌には給食実施を喜ぶ生徒の記録が残されています(右下参照)。

『給食はいやだ。』という声は一言も聞こえない」という最後の一文に、給食の時間を楽しく過ごす当時の生徒の素直な気持ちが表れています。

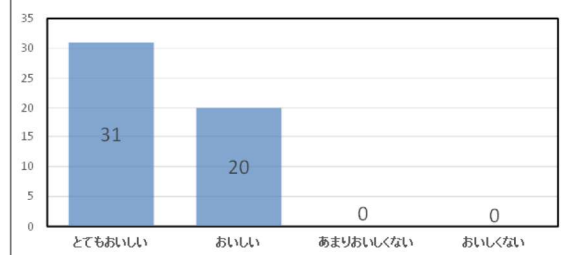
先日、実施したアンケート結果に再び目を移すと、「給食の時間は楽しいですか？」という質問に「あまり楽しくない」と回答した生徒が1名いることが確認できます。その理由として「(黙食の習慣により※田口補足)友達と話せないから」とありました。

同じものを、同じ時間に、同じ場所で食べる「共食」の意義を考えた時、この生徒の思いをどのように受けとめるべきなのでしょう。学校給食、ひいては学校教育の役割を考えた場合、この問いは生徒、保護者、教職員がともに考える価値があるように思います。食卓の話題に取り上げ、ともに考えていただけたら幸いです。

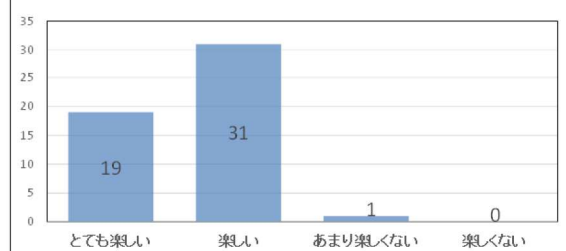


十月九日(金)
給食テーマ「目の愛護」
スープの中のちくわは、視力検査で用いるランドルト環を模す徹底ぶり！

1 給食はおいしいですか



2 給食の時間は楽しいですか



集団生活と給食

ぼくは保育園の時からずっと給食があたりまえのように思っていた。だから、給食があったりまじったお弁当は、心の中でおかしい、あたふたのつくりだのものが食べられることも給食のよい点である。

ぼくたちのクラスでは給食の時間みんな明るく楽しそうに、「給食は、いやだ。」という声は、一言も聞こえない。

れ適當にバラバラに食べていたのとは違ったまじりのようなものを食べる。よく「同じ釜の飯を食べた仲。」などというが、なんとなくそんな気持ちが出てきて、クラスとしてのまとまりがよくなったように思う。

おかあさんの心のこもったお弁当は、とてもうれしいが、あたふたのつくりだのものが食べられることも給食のよい点である。

「高とこ」第65号(昭和51年7月21日発行)
※作者ご本人の許可を得て掲載しています



地域交流で学び多き活動

1 年生 ～敬老会でおもてなし～

10月14日（水）、1年生は中郷区の敬老会に参加しました。会場設営や参加者の座席へのエスコートなど、さまざまな役割を果たしました。当初、緊張気味の表情だった生徒も徐々に相手を見ながら、笑顔で受け答えするようになりました。

会を終えた生徒は「地域の方に喜んでもらえてうれしかった」「人のために行動することの大切さを学んだ」「これからも地域のためにできることをしていきたい」などと活動を振り返りました。

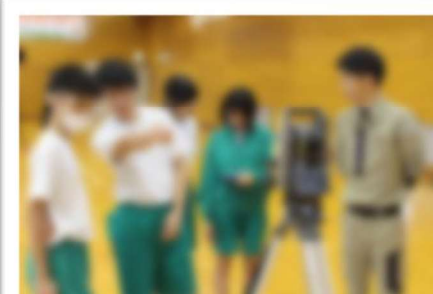


2 年生 ～土木の仕事とその役割を学ぶ～

9月29日（火）、2年生は、土木出張PR事業に参加しました。10名以上の事業関係者が訪問し、土木事業についての講話や測量体験等を行いました。講話の最後にスライドで示された以下のメッセージを生徒は真剣に見入っていました。

- 土木は、皆さんの「あたりまえ」をつくっています
～あたりまえのようで、かけがえのないこと～
- 土木は、皆さんの「安全・安心」を支えています
～人に支えられる「私」から、人を支える「私」へ～
- 土木は、皆さんの「未来」につながっています
～10,20,30年後…未来の主演は皆さんです～

※なお、当日の活動については、新潟日報（10/15付）で紹介していただきました。



3 年生 ～災害時に「伝わる日本語」を考える～

9月28日（月）、3年生は上越国際交流会の堤 信子 様をお招きし、防災に関する学習を行いました。

避難所には日本語が堪能でない方も利用します。また、緊急時は思うように意思の疎通がされないこともあり得えます。そこで、今回は避難所での「やさしい日本語の作り方」についてワークショップ形式の活動を通して学びました。分かりやすい言葉で話すことは、災害時に限らず、普段の生活においても大切にしたいものです。

